自然という名の「先生」

奈良県　智辯学園奈良カレッジ中学部　２年
辰巳　奈那子

ふと、まわりを見てみると、世界の自然はどんどん破壊されている。「自然が破壊されている」と聞くと、多くの人が、環境問題の話だと思うだろう。しかし、これからの話は違う。よく聞いてほしい。

私たちは、自然から、人に足りない何かを学んでいると思う。それは何だろう。自然を見てみると、よく分かる、人に足りないもの。その一つが「しがみつこうとする気持ち」だ。

例えば、池や川にいるメダカを見てみよう。メダカは、流れにさからうように泳ぐ。とにかく泳ぐ。泳ぎ続ける。それは、流れに流されないようにするためだ。流れにしがみつくためだ。

鮎も同じだ。鮎は、人工化した川を昇っていく。十センチメートルにも満たない小さな体で、一メートルを優に超える、大きな壁に立ち向かう。自分の何倍もの壁に立ち向かって、乗り越える。餌のある「楽園」を求めて。

木だってそうだ。木は、望んだ環境に生えることができないかもしれない。光が差し込まない、暗闇に生まれるかもしれない。でも、その木は諦めることなく、ただ、光の当たる場所を目指して、伸び続ける。

では、私たち人間はどうだろうか。時の流れにしがみつけているだろうか。流されていないだろうか。立ちはだかる壁に立ち向かい、乗り越えられているだろうか。一つ例を挙げてみよう。最近よく聞く、

「これだからゆとりは……。」

という言葉。こう言われた「ゆとり世代」の人たちは、

「ゆとりを作ったのは、お前らじゃん。」

と思ったりするのではないだろうか。たしかに、そういうふうに思うのは、当たり前だと思う。一年前の私も、同じことを考えていた。大人は、わがままな生き物だな、と。しかし、理科でメダカについて学んだことで、私の考えは崩れ落ちた。メダカは、どんな流れにも、ただただしがみつくのだ。悪いのは、流れを作った環境ではない。悪いのは、流れにしがみつけないことだ。ならば人間も、メダカや鮎や木を見習って、しがみついていこう。乗り越えていこう。同じ生き物なのだから、私たちにできないわけがない。「ゆとり世代」という流れの中にいるのなら、その流れの中で、必死にもがき、進んでいかなければならない。一人一人に与えられた、その「流れ」を自分なりに乗りきればいいのだ。周りのやり方なんて関係ない。自分のやり方でやればいい。そうすることで、人は成長し、進んでいく。時の流れに流されることなく……。

どうだろうか。今までの世界が、ガラッと変わったのではないだろうか。これからは、

目に入ってくる自然の一つ一つから、少しでも多くのことを学んでいこう。そして、その一つ一つを、できるだけ多くの人に伝えていこう。あなた一人の行動で、周りの人の自然の見方が変わる。絶対に変わるのだから。

さあ、外に出て、目を閉じよう。目を閉じたら、もう一度今の話を思い出してほしい。そして、目を開けて、周りを見て。私たちの「先生」を。自然という名の「先生」を。「先生」は、いつも私たちのそばにいる。私たちのすぐ横に。そして、今まで気付くことのなかった、新しい世界を気付かせてくれる。いつでも、いつまでも、教えてくれる。この世に、「先生」が居る限り。なのに今、私たちは、そんな偉大な「先生」を失いつつある。